


ガイドと歩く気分で楽しめる！




このマップは、元萩観光ボランティアガイドの会長の中村芳生さんと一緒に歩いてつくったマップです。芳生さんから教えていただいた堀内地区の見どころスポットを○で示しています！

まち歩きの日安

1→16 : 所用時間 2 時間  
1→10 : 所用時間 1 時間


### 1 萩博物館

三の丸に広がっていた重臣たちの武家屋敷を参考に設計された博物館。堀内地区のまち歩きを始める前に、まず萩博物館で堀内地区の情報を集めましょう。




### 2 大馬場筋

江戸時代、外堀の内側には馬場が広がり、家臣たちの乗馬や武術の訓練などが行われていました。




### 3 本町（御成道）

本町は、藩主の御成道でした。1万石前後の武家屋敷が道の両側に建ち並び、その基礎石垣には加工の難しい大きな花崗岩が主に使われています。かつては現在の約2倍の道幅でしたが、広すぎる道を桑畑に変更して今の道幅に狭まりました。当時の道幅を基礎石の違い等から判断することができます。



### 4 藩政期の土堀

生け垣の裏をのぞいてみてください。そこにはひっそりと藩政期の古い土堀が残っています。この土堀は、当時の御成道の道幅を今に伝えています。




藩政期の武家地を巡るトレイル

30分コース：1→2→3→4→猫町→浜町沿いの長屋門→16→17→外堀→1  
60分コース：1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→12→13→1  
90分コース：1→13→14→15→浜町→浜町沿いの長屋門→16→17→外堀→1


### 5 問田益田家旧宅土堀

堀内地区に残る最も長い土堀です。この真っ白な漆喰土堀が、堀内地区全体の光景でした。古くから住む人によると、夏には白壁に日光が反射して、とてもまぶしかったそうです。




### 6 旧梨羽家書院

大組士 683 石 梨羽家の書院。堀内地区に残る数少ない武家屋敷の本邸の一部で、19 世紀に建築された貴重な建築物で、県指定有形文化財です。




### 7 旧児玉家長屋門

寄組士 2,243 石 児玉家の長屋門。外壁がなまこ壁の立派な造りで、旧城下から外堀を渡って、この長屋門に辿り着くと、三の丸らしい重厚な造りに目を奪われます。




### 8 平安橋

城内と城下を隔てる外堀上にかかる片持ち梁構造の 18 世紀の石橋です。橋を渡ると城内に入る 3 つの門のうちの 1 つ「平安古の総門」があり、ここでは常に厳しい監視が行われていました。




### 9 堀内の鍵曲

鍵曲とは、迷路のような鍵形に曲がった見通しのきかない街路です。今も江戸時代にタイムスリップしたかのような錯覚をおぼえます。大河ドラマなどのロケ地としても多く使われています。




### 10 口羽家住宅

寄組士 1,000 石の口羽家は、堀内地区において唯一の武家屋敷の主屋が残っており、子孫が現在も住んでいます。表門は江戸中期の建築で、屋敷全体が国指定重要文化財です。




### 11 広小路の三本桜

江戸時代、北側に延びる「広小路」はもっと道幅が広く、このあたりが元の道幅でした。明治以降、畑地の拡張で道幅が狭められました。




### 12 旧福原家萩屋敷門

福原家は永代家老を務め、禄高 1 万 1 千 3 百石の重臣でした。門は江戸中期の建築で、武家屋敷には珍しい全体的に派手な造りで、県指定有形文化財です。




### 17 北の総門と外堀

城内に入る 3 つの門のうちの 1 つで、平成 16 年 (2004) に萩開府 400 年を記念して復元されました。高さ 7m の格式ある高麗門は、国内最大級の城門といわれています。外堀は、初期には幅が 20 間でしたが、江戸中期に 8 間になりました。また、外堀内側に築かれた土塁も部分的に残っています。外堀を当時の姿へ復元する保存整備が進められています。




### 16 旧益田家物見矢倉

益田家は永代家老を務め、禄高 1 万 2 千石の重臣でした。建物は、北の総門の近くに位置し、人の出入りを見張る物見矢倉であったと言われています。




### 15 萩城跡

慶長 9 年 (1604) に築城された毛利氏の居城です。五層の天守 (高さ約 20m) がそびえていましたが、明治 7 年 (1874) に解体されました。萩城本丸の遺構として、広大な石垣群と大きな内堀が往時の姿を伝えています。




### 14 旧厚狭毛利家萩屋敷長屋

厚狭毛利家は一門三席、禄高 8,371 石の重臣でした。長屋は、現存する武家屋敷では一番大きく、長さが 51.5m あります。



### 13 天樹院墓所

萩城を築城した毛利輝元の菩提寺「天樹院」の跡です。現在は、墓所のみが残されています。

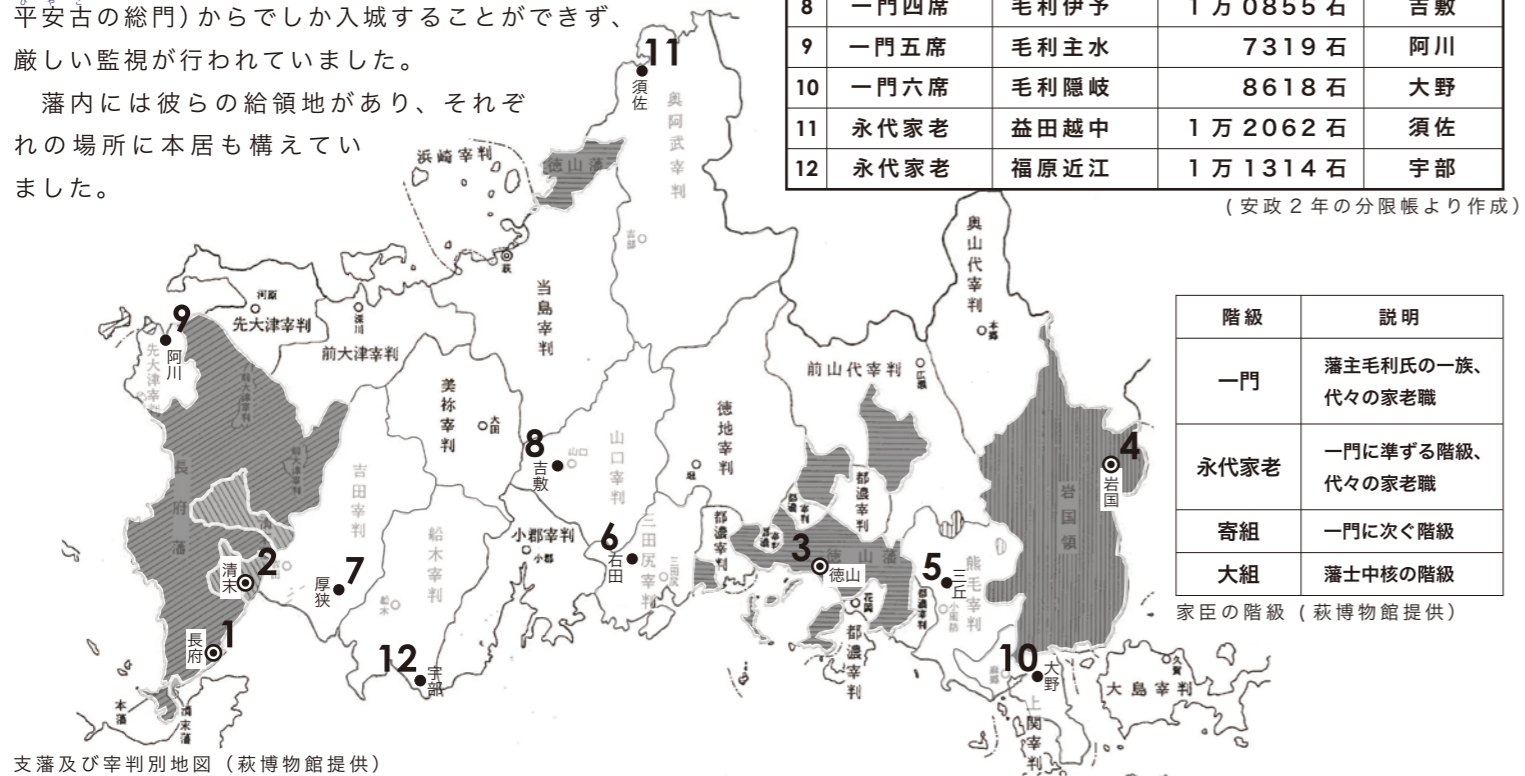


## 堀内に居を構えた萩藩の重臣たち

かつて堀内地区は、萩城三の丸として萩藩の重臣たちが居住した屋敷地が広がっていました。1千石以上の武士が7割を占め、1万石前後の武士が御成道沿いに屋敷を構えていました。

三の丸へは、3つの総門（北の総門・中の総門・平安古の総門）からでしか入城することができず、厳しい監視が行われていました。

藩内には彼らの給領地があり、それぞれの場所に本居も構えていました。

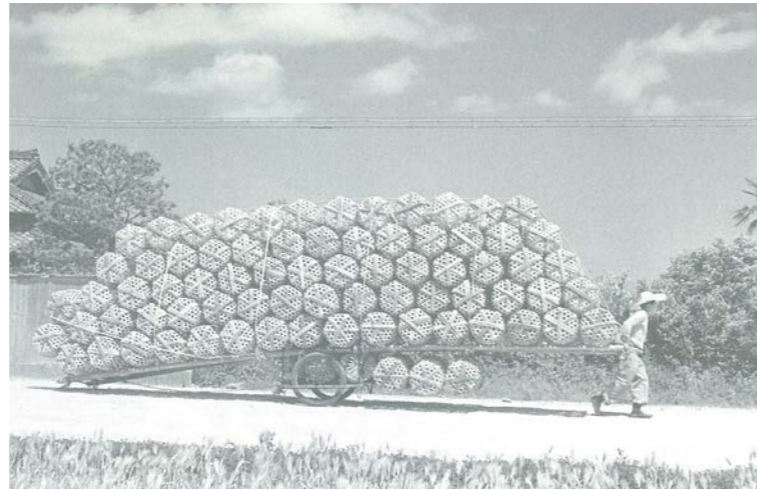


支藩及び宰判別地図 (萩博物館提供)

## 明治維新と武家屋敷の解体

幕末の激動期、13代藩主毛利敬親の山口移鎮により重臣たちは山口へ移りました。さらにその後の明治維新による幕藩体制の崩壊によって広大な武家屋敷を維持することが困難となりました。家主を失った武家屋敷は除々に解体、または荒廃し、消失していきます。

しかし旧萩藩士小幡高政の奨励により、荒廃した屋敷内での夏みかんの栽培が行われるようになりました。この夏みかん栽培は昭和30年頃までの間大変活況を呈したために、広大な都市空間を近代化に伴う開発の波から防ぐことができたのです。



橙籠の車 (萩博物館提供), 昭和18年 (1943) 4月, 角川政治撮影

## 石積み塀 —堀内散策、注目ポイント—

藩政期、各屋敷の周囲は花崗岩か安山岩 (笠山石) かの単一石材で組まれた基礎石垣の上に、土塀や長屋が築かれていました。明治以降も、夏みかんを風害から守るためにこの土塀は残されました。

次第に朽ちていった土塀は、屋敷内の不用な石や笠山からの採石などで修理され、2種類の石材が混合した石積み塀が見られるようになりました。

また、夏みかん畑に転用するにあたって、既存の屋敷の門口では幅が広すぎたために、この石積み塀で埋められました。



萩城下絵図 (幕末期の絵図を基に NPO 萩まちじゅう博物館が作成)

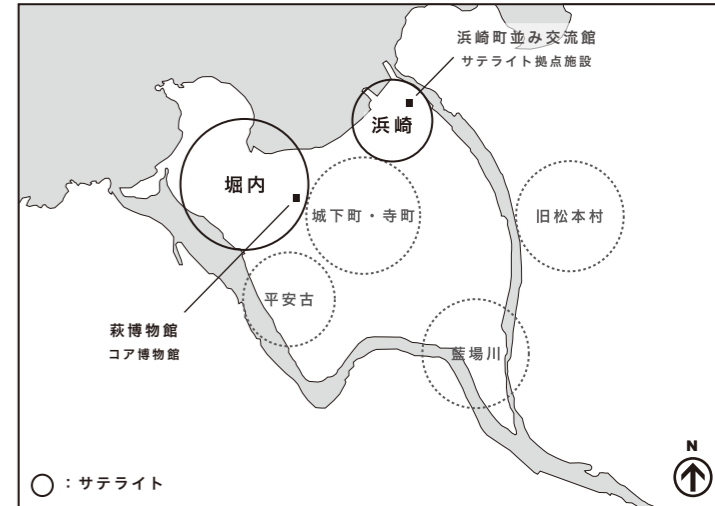
日本を近代化へと導いた萩藩。その藩主毛利氏が居住した萩城本丸・二の丸。そして藩の重臣武家たちが居を構えた三の丸。そこは今も、彼らが居住した当時の豪壮な面影を偲ばせている。

古地図を片手に萩を歩こう  
豪壮な武家屋敷の面影へ堀内伝建地区へ

## 萩まちじゅう博物館 | 堀内サテライト

萩まちじゅう博物館は、萩博物館を拠点に、まちじゅうに広がる豊かな歴史や文化、自然の遺産を展示物ととらえる、屋根のない広い博物館です。そして、それらの遺産を保存・活用し、次世代に伝えていこうとするまちづくりの取り組みでもあります。

萩まちじゅう博物館には、エリアやテーマでまとまりをもった、いくつかのサテライト (地域博物館) があります。このマップでは、その1つ、「堀内サテライト: 萩城-本丸・二の丸・三の丸」をご紹介します。また、出発点となる萩博物館では、エントランスホールの「まちなみウォークスルー」や常設展示で、堀内地区の歴史や江戸時代の様子を学ぶことができます。



## 堀内サテライトについて

萩城三の丸=堀内地区は、藩主毛利一門、そして永代家老・寄組等の上級武士が居住した広大な武家屋敷跡です。

幕末、明治維新の激動の時代を経て屋敷そのものは消滅してしまいましたが、その都市区画はほとんど変わっていません。この広大な武家屋敷跡の遺構の上に近代の人々の住みこなしによって醸成された、多様な時代の変遷が見てとれる町並みは日本でも大変珍しく、昭和51年、堀内地区は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。



堀内の鍵曲

